

アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



杉村孝（一九三七—二〇三三／昭和十二—令和五）
《しゃくじんシリーズによる》
一九八六（昭和六二）年
石
一三〇・〇×三三〇・〇×三三〇・〇cm
静岡新聞社寄贈

彫刻プロムナードの入り口に設置された本作は、第六回富嶽文化賞展で大賞を獲得したものの（上の写真は出品時に撮影された）。大きな石を六つに割り、中央の一つを取り除き、再び一つに組み合わせている。そして、取り除いた中央部分に見える石の割り肌を、滑らかになるよう研磨している。石の自然な質感と、研磨された艶やかな黒色の表面が魅力的な作品である。

作者の杉村孝は、藤枝市出身。当初は家業の石材店で働くが、彫刻制作を志し、二紀会の北川薫の指導を受けるなどし、石彫家として活躍するようになっていった。本作のタイトルには「石の神」を意味する「しゃくじん」が付けられている。一時期清水に移り住み、後に東京を拠点に静岡と往復しながら活動していた評論家の石子順造を、杉村は一九六九年に知り、やがて石子と交流するようになった。杉村は、石子が抱いていた丸石神等への関心を共有していた。

（上席学芸員 植松 篤）

No.
156
2024年度 | 冬 |

追悼二代目会長高階秀爾先生

館長 木下直之

タイトルは、本誌第一三七号(二〇二〇年春)巻頭の小文「追悼五代目館長芳賀徹先生」になぞらえた。おふたりは無二の親友であり、学友であり、比較文学史と美術史という隣接する学問領域で大きな業績を残したばかりでなく、静岡県立美術館の歴史にも深い足跡を刻まれました。二〇二四年一月一七日に九二歳で亡くなられた高階先生の功績を讃えるとともに、私の個人的な思いを書きつけます。

芳賀館長からバトンを引き継いで、私が六代目館長に就任したことは、本誌第一二六号(二〇一七年夏)の「二三の初仕事について」に書いたとおり。では、高階先生から受け継いだバトンとは何か。それは明治美術学会の会長職でした。高階先生が三代目、私はこどもでも奇しくも六代目。一九八六年開館の当館は来年に四〇周年を迎え、八四年創立の明治美術学会は昨年に四〇周年を迎えました。六代目とはそのよ

うな巡り合わせ、四〇年の歴史が肩に重くのしかかっています。

社会の中に美術館や美術を論じる学会が当たり前に存在する環境を、いったい誰が用意してくれたのでしょうか。もちろん、何にでも前史はあるから、その前の七〇年代、六〇年代、五〇年代へとさかのぼることは可能ですが、私の個人史を振り返れば、それは疑いなく七〇年代でした。裏表紙に「一九七一年七月読了」と記した、今でも大切に持っている本は高階秀爾『名画を見る眼』(岩波新書、一九六九年)です。高校生でした。赤線だらけ、それを引いた時の興奮が今も鮮やかによみがえります。家の二階で、読みながらたれていた柱の硬さまで覚えています。この小さな本が美術の世界への入口でした。新書ゆえに高校生にも手に取れたわけですが、扉を開くと、その先には美術の広大な世界が待っていました。

七〇年代はまた美術全集の時代です。出版社が競い合うように刊行し、「美術」が暮らしの中に浸透、美術史を学ぶ大学生となった私はその恩恵に浴しました。西洋美術をわかりやすく、しかし学術的な水準で語りかけてくれた水先案内人が高階先生にはかなりありません。

他方、先生は日本美術にも目を向け、積極的に発言され、その成果は『日本近代美術史論』(講談社、一九七二年)となって世に出ます。それが結節点となって、明治美術学会が誕生したのでした。この学会の活動と美術館は不可分でした。大学中心の学会と異なり、そこには多くの美術館学芸員が参集しました。美術史とは机上の学問(美術全集の図版)ではなく、実物と向き合うことから始まるのですから、その環境を用意したのは、やはり七〇年代から全国各地に続々と建設された美術館でした。当館の八六年の開館とは、その

ような歴史の中に位置しています。

高階先生ご自身がフランス留学から帰国されると国立西洋美術館に勤められ、晩年は大原美術館の館長を長く勤められた。美術館の意義、社会や暮らしにもたらす効果を説き、その活動を大切にされてきました。そのような信念で、当館の第三者評価委員会の立ち上げに尽力されたのです。

美術館が社会に対してより良い存在であるためには、外部評価が欠かせません。開館一七年目の二〇〇三年に静岡県立美術館評価委員会が発足し、先生はその委員長に就任されました。二年間に九回の会議を重ね、『提言』評価と経営の確立に向けて(二〇〇五年三月)が出され、その結果、翌年九月に第三者評価委員会が誕生しました。

『提言』の冒頭で、高階先生がこんなことを語っています。「現状をどのように変えていくかという問題意識と志がなければ、どのような新制度も絵に描いた餅に終わりがかねない」。これを先生の「遺言」と受け止め、六代目館長としての「志」＝美術館はどこを目指すのかを、開館四〇周年に向けて示してゆくつもりです。

謹んで、高階秀爾先生のご冥福をお祈りいたします。

ミュージアムショップリニューアルのごあいさつ

株式会社オークコーポレーション 店舗運営部 運営2課 岸本 光生

二〇二四年七月にリニューアルし

たミュージアムショップの運営委託

を任せました、株式会社オークコ

ーポレーションの岸本と申します。

執筆の機会をいただきましたことへの感謝と、グッズ作りへの想いをしっかりと伝えなければという緊張で胸がいつぱいですが、温かい目で読んでいただければ幸いです。

株式会社オークコーポレーションは、ミュージアムショップ運営とオリジナルグッズの開発、美術館や博物館、水族館などへの商品の卸を主に行っています。私が所属している店舗運営部は、文字通り様々な展示施設のミュージアムショップの運営を担当しており、北は北海道、南は福岡県まで全国各地のショップで、お客様に喜んでいただけるよう日々精進しております。静岡県内では、静岡駅近くの水族館のミュージアムショップを運営しており、そのショップの様子を美術館の皆様にご覧いただいたことがご縁で、今回のお話

をいただきました。

はじめて美術館にお伺いし、オリジナルグッズの商品企画を進める際にまず驚いたのは、収蔵品の多さで

した。横山大観《群青富士》、伊藤若冲《樹花鳥獸図屏風》、オーギュスト・ロダン《考える人》等々…。

挙げていったらキリがないくらい有名な作品ばかりですが、当然のことながら常時展示するのは保護の面から難しく、全収蔵品をローテーションで展示すると、すべてをご覧いただくには数十年はかかると聞いた時は、どの作品をいつ展示するのか、企画の難しさを感じました。

一方、ショップにおりますと、お客様とお話しする機会がよくあります。静岡県立美術館では、お気に入りの作品が展示されるのを待ち望んでいるお客様が想像以上に多いと感じました。そこで、「いま展示されていないなくても、グッズを通していつでも会える」という喜びをお持ち帰りいただけるよう、美術館が収蔵す

る数々の作品をモチーフにしたオリジナルグッズの製作に力を入れていくことにしました。

リニューアルオープンに際しては、横山大観《群青富士》の竹うちわ（写真①）とトートバッグ（写真②）、伊藤若冲《樹花鳥獸図屏風》、狩野永良《親子犬図》のホログラムステッカーのほか、ロダン作品では新規撮影を行い、ポストカードを作成しました。私のおすすめはロダンの《考える人》と《地獄の門》のアクリルスタンド

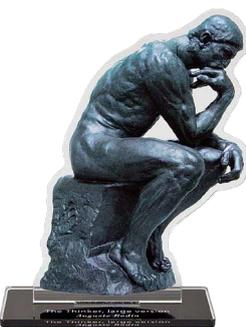
（写真③）です。彫像のため、グッズというミニチュアレプリカが多いですが、気軽に楽しんでもらえるよう流行りのアクリルスタンドで表現しています。更に二〇二五年一月より始まる伊藤若

冲《樹花鳥獸図屏風》の展示に合わせて、新たな若冲オリジナルグッズが登場します。また、ポストカードも新しく作り直すほか、新所蔵作品などを含むオリジナルグッズ化ができていない作品のグッズ企画を進めてまいります。

静岡県立美術館での思い出を形にしてお持ち帰りいただけるように、芸術に寄り添える場所になれるように頑張っています。ぜひ静岡県立美術館ミュージアムショップに足を運んでいただきますよう、よろしくお願いいたします。



写真① 竹うちわ



写真③ アクリルスタンド



写真② トートバッグ

企画展

生誕140年記念
石崎光瑠

2025年1月25日(土)～3月23日(日)

生涯にわたって理想の花鳥画を追い求めた日本画家・石崎光瑠（一八八四～一九四七）。少年期の写生から最晩年の大作まで、光瑠の画業を通覧し、その類稀な絵画世界に触れていただく大回顧展を開催します。

現在の富山県南砺市に生まれた石崎光瑠は、十二歳の時、金沢に滞在していた江戸琳派の画家・山本光一に師事、十九歳で京都に出て竹内栖鳳の門に入りました。やがて官展を舞台に活躍するようになりますが、登山に熱中する一時期を過ごし、民間パーティーとして初めて劔岳登頂に成功するなど異色の経歴の持ち主でもあります。

三十二歳となる一九一六年にはインドに渡り、翌年にかけて各地を遊歴、これが画家としての転機となりました。旅行の成果である熱帯主題の華麗な花鳥画により、文展・帝展で連続特選という快挙を成し遂げたのです。図1の《燦雨》（一九一九年）は、二回目の特選を受賞した作品です。強烈な赤と緑、そして金泥を駆使して、スコールに驚くインコや孔雀の姿を一面のホウオウボク（鳳凰木）とともに描きます。光瑠の代名詞ともいべき絢爛豪華な世界がくろり広げられますが、そこには、異国の濃密な自然に身を浸し、驚きと感動に目を見張る画家の姿がそのまま映し出されているかのようです。ぜひ作品を前にして、躍動する生命の輝きと、画家の新鮮な心の動きを味わってください。

幅広く絵画研究に取り組んだ光瑠は、一九二二年にはヨーロッパを旅して西洋絵画に触れ、特にフレスコ画に関心を寄せました。無論、日本・東洋の古画にも熱心に学んでいきます。本展の目玉のひとつである高野山の金剛峯寺奥殿襖絵（《虹雉》一九三四年「図2」、《雪嶺》一九三五年）は、古画研究の成果が結実した

作品といえます。取材のためにインドを再訪し、並々ならぬ意欲で取り組んだ一群の襖絵には、近世初期障壁画の巨木表現や、俵屋宗達をはじめとする琳派、あるいは西洋絵画からの差し響きを認めることができます。通常非公開の奥殿襖絵をご覧いただく貴重な機会です。どうぞお見逃しなく。（前後期展示替え）

独自の画境を打ち

立て、金剛峯寺の障壁面制作という大事業にも取り組んだ光瑠ですが、ここに安住することなく自身を改革し続けていきました。昭和十年代の作品は、広い余白のなかに繊細な線描でモチーフを描き、研ぎ澄まされた静謐さをたたえるようになりま。その振り幅の大きさには驚かされますが、理想の花鳥画を求められますが、理想の花鳥画を求めるといえる世界を切り拓かせたものといえるでしょう。



図1 石崎光瑠《燦雨》（左隻） 1919年 南砺市立福光美術館



図2 金剛峯寺奥殿（虹雉の間）※襖絵は石崎光瑠《虹雉》1934年（前期展示）

本展では、光瑠の故郷にある南砺市立福光美術館のコレクションを中心に、約八十点をご覧いただけます。光瑠が伊藤若冲に強い憧れを持っていたことから、同時期の収蔵品展では当館の伊藤若冲《樹花鳥獸図屏風》も展示します。どうぞこの特別な機会に、花鳥画の粋をご堪能ください。（学芸課長 石上充代）

※会期中、一部展示替えがあります。

前期 一月二十五日～二月二十四日

後期 二月二十六日～三月二十三日

石崎光瑠展関連収蔵品展

第1部 異国への眼差し

2025年1月4日(土)～2月16日(日)

第2部 絢爛たる花鳥画

2025年2月18日(火)～4月6日(日)

石崎光瑠が伊藤若冲(一七一六一—一八〇〇)の画業に魅了されたことになみ、若冲作品を陳列する展示を二部構成で行います。第一部では、光瑠がインドを訪れた経験を自作へ昇華させたことを踏まえ、海外からの影響が反映された日本の絵画に注目します。第二部では光瑠が得意とした花鳥画をテーマとし、江戸時代の作品を中心にご覧いただきます。

第1部 異国への眼差し

実際にインドを訪れ、各地で取材することができた石崎光瑠とは異なり、伊藤若冲が活躍した江戸時代の大多数の人々にとって、より距離が近い中国や朝鮮も、到底行くことの叶わぬ、遥

かなる存在でした。

海外渡航が不可能な時代において、貿易によってもたらされた絵画作品のみならず、書籍なども、重要な学習手段となります。例えば、中国より舶載された版本の挿絵は、狩野派の絵師や文人画家たちにとって規範となりました。本展冒頭では、中国の版本等から図像が借用された作品を通じ、その学習の実態をうかがいます。

江戸時代中期以降、西洋科学の知識や技術に対し、関心が大いに高まる中、江戸の司馬江漢のように、油彩画や銅版画など、西洋画法に取り組み絵師も現れました。更に交易路上にある諸地域の風土や文化への興味も深まります。日本に生息しない生物も描かれた《樹花鳥獸図屏風》には、こうした異国への憧憬が反映されているという見解も出されています。

幕末に近づくにつれ、西洋列強による東アジアへの進出は、社会に緊張感をもたらししました。絵画においても、外国人の風俗や黒船来航を描く作品には、開国が間近に迫った、当時の人々の揺れ動く異国観をうかがうこともできるでしょう。

海外との交流が制限される中、江戸時代の絵師たちが、異なる文化をどのように捉え、学び、そして絵に描いたのか。本展ではその在り様の一端をご覧いただけます。

(主任学芸員 浦澤倫太郎)



伊藤若冲《樹花鳥獸図屏風》当館蔵 (1月24日(金)～3月23日(日)に展示)



司馬江漢《駿州薩陀山富士遠望図》当館蔵 (第1部で展示)



長沢蘆雪《牡丹孔雀図》当館蔵 (第2部で展示)

第2部 絢爛たる花鳥画

いつの時代にも色とりどりの草花や、美しい鳴き声を響かせる鳥に人々は魅了され、その姿を絵画に描き留めてきました。日本では古代中世から儀礼や祭礼、あるいは日常生活など、あらゆる場面で詩歌が歌われ、特に季節と共に移ろいゆく花鳥は、四季景物の最たるものとして、様々な心情が託されてきました。そして、これらの歌意は〈歌絵〉として絵に描かれて、儀礼に用いられ、時に人々の徒然を慰めてきました。

やがて花鳥を描く絵画は一つの画題、花鳥画として成立し、城郭や御殿、寺院を飾るまでに展開しますが、大き

な転換点を迎えたのは江戸時代に入ってからです。特に十八世紀には、従来の中国絵画や中世やまと絵の伝統に則った格調高い花鳥画に加え、西洋

画法を取り込んだ写実的な花鳥画、博物学的関心によって異国の花鳥に取材した花鳥画など、その主題と表現は多様化しました。さらに、伝統画派である狩野派や土佐派のみならず、琳派や円山四条派、文人画家、あるいは伊藤若冲ら諸派兼学の絵師など、個性豊かな絵師の彩管によって、主題や表現の制約からも解き放たれた花鳥画は、百花繚乱の黄金期を迎えました。

本展覧会では、伝統スタイルの狩野派から、诗情豊かな円山四条派、中国・明清時代の新スタイルを学んだ文人画家などの花鳥画を展覧しながら、江戸時代花鳥画の魅力に迫ります。

(主任学芸員 薄田大輔)

館蔵品紹介—澤田政廣《笛人》について

上席学芸員 南 美幸

澤田政廣（一八九四・明治二十七—一九八八・昭和六十三）は大正期から昭和末期まで活躍した、熱海生まれの木彫家である。作域は幅広く、木彫以外にブロンズも扱い、油彩、素描、水彩、版画、書、ステンドグラスなどを手がけた。作品数は膨大な数に上る。静岡県立美術館は、四体の木彫を収蔵している。本小論では、当館コレクションの《笛人》について、作者自身の言葉と作品群を手がかりに、その特色と澤田の作歴における位置づけについて考察する。なお、澤田政廣作品に関する批評は雑誌および新聞や展覧会図録などの出版物に数多く見られるものの、《笛人》をはじめ、学術的な先行研究は見当たらない。

まずは、澤田の略歴について。はじめ画家を志したが両親の反対にあい、高村光雲の高弟で遠縁の木彫家・山本瑞雲（一八六七—一九四二年）に師事、五年間木彫の修業を積む。同時に、太平洋画会研究所で藤井浩祐（一八八二—一九五八年）の指導を受け、さらに一九二四から二年間、東京美術学校彫刻科別科に入学し、朝倉文夫（一八八三—一九六四年）に師事した。このような彫刻の修練・研究と並行して、一九二一年、第三回帝展に出品し、初入選を果たす。以降、亡くなる前年まで、帝展、文展、日展にはほぼ毎年参加し、官展系の、一九五八年以降は民営化した日展の作家の重鎮として活躍し、要職を歴任した。

次に、《笛人》について述べる。本作は、両膝をつき、中腰で、体を前右方に傾け、横笛を体の右側面に構えて吹く女性裸体像

である。一九七一年、第三回改組日展に出品された³。胡粉を塗色された身体は、よく仕上げられているものの、ゆるやかなノミ跡を残す。一方、黒と赤で彩色された髪は逆立ち、台座とともに荒彫りである。乳房、細いウエスト、臀部の表現など、体つきは女性だが、顔立ちや髪型は、どこか中性的雰囲気感を漂わせる。動きの表現はあるものの、静謐さを感じさせる作品である。下記は、本像の技法

- 1 立体感を出すため、クスノキに薄く胡粉を塗ってある
- 2 木彫にはノミのリズム、速度がないのはつまらない
- 3 裸婦というだけでは芸がない。写実というよりも、わたしの長年あためていた夢から生まれた作品

まずは技法についてだが、色彩へのこだわりと彫痕が残る荒彫りは、初期から澤田がこだわり、追求した技法である。「内面的なもの、いつてみれば彫刻の生命、あるいは呼吸といったものを、形と同時に色彩をも使って捉えようと試み」、「ノミのリズム、制作の速度を端的に表現できるのも荒彫りの仕事」であり、「リズムは仕事にとって本質的なもの」と述べる彫刻家は、全体あるいは部分的な彩色と、入念な細部の仕上げと奔放な荒彫りとを、作品ごとに使い分けるか、あるいは《笛人》のように混



澤田政廣《笛人》1971（昭和46）年
木、彩色 H89.2×W65.0×D58.8cm 静岡県立美術館蔵

在させることによって、独自の制作技法を確立させた。

次に主題ないし造形的意図について。裸体の女性単独または群像は、仏像とともに、澤田が生涯を通して探求した表現である。仏教および日本の古代神話・伝説のほか、歴史上の人物や西洋の神話などにも取材した作者にとって、一九一九年の展覧会に初出品した「裸婦像」以降、女性裸体像は主要な関心事のひとつとなった。加えて、単なる裸婦ではなく「写実というよりも、長年あためていた夢から生まれた作品」という本作に対する発言は、基本的な制作コンセプトを示す。というのも澤田は晩年に、モデルを写実的に表すのではなく、まず内面にあるイメージの実現に向けてモデルを用いる手法を制作の初期から探求したこと⁴を吐露しているからである。言い換えれば、藤井浩祐らから当時の塑造すなわち写実重視の西洋彫刻研究に基礎を置く考え方や制作方法を学びながらも、木彫家としてそれ

とは異なる方向を模索した澤田独自の基本姿勢と言えるだろう。

さて本像に関し、作者は「笛は題名自体にはたいして意味はない」、「以前にこのポーズのデッサンを多く制作した」とも述べる。笛を吹く女性のモチーフは、作歴半ばの一九三〇年代中頃から一九八〇年代の長きにわたり、立体・平面ともに、澤田が幾度も取り上げた表現である。その多くが、澤田が生涯一貫して追求した天人・天女の主題で用いられることは注目すべきであろう。10。それらは、ひとつまたは複数の髻で、天衣と裳、時に宝冠や胸飾を身につけながら、空を飛ぶ飛天の姿か、半跏趺坐または片膝を立てた座位で横笛を吹く姿で表されている。一方、作品名に天人・天女がつかないものも、笛を吹く女性を表した素描は、座位で横笛を吹き、作品により髪型の変化が多少見られるが、天衣を身につけたものもあり、先の笛を吹く天人・天女とほぼ同様の描写と言える。従って、澤田の笛を吹く女性像は、古くは法隆寺金堂天蓋飛天や平等院鳳凰堂中供養菩薩など、天人・



澤田政廣《地におりた天人》1982（昭和57）年 木、彩色
H84×W55×D55cm 熱海市立澤田政廣記念美術館蔵

天女の伝統的図像を基本的には踏襲しており、作者の仏像彫刻家としての側面を示す。

このような《笛人》以前の笛を吹く女性像と《笛人》とを比較すると、座位で横笛を吹くポーズはほぼ類似する一方で、後者は天衣や裳を身につけない裸体という異色かつ独自の造形的特徴をもつ。作者自らによる題名に意味はないという発言と、笛を吹くモチーフがそれまで天人・天女の主題で多く取り上げられたことを考え併せると、《笛人》もまた、伝統的モチーフを借用しながら現代的形態を追求した、澤田独自の天人・天女図の一ヴァリエーションと言えるのではないだろうか。当時の批評に見られる、本作の「優雅なリリズム」を感じさせる要因の一つに「古典的な主題」が挙げられているのは、笛を吹く女性像がそれまでの天人・天女図を連想させるからではないかと思われる。「型通りの仏像よりも、血肉を感じさせる人間臭い仏像が好きだ。それがわたしの天女図になる」という作者の言葉からも、12。笛を吹く女性像／天人・天女は、芸術家に限らない想像力を与える、可変性をもつテーマかつ鍵となるモチーフだったと考えられる。《笛人》以降、作例は少ないものの、澤田は一層自由な発想に基づく天人・天女を推し進める。笛こそ持たないが、西洋の天使のような翼をもち、逆立つ髪と裸体、中性的な顔立ちの点で《笛人》と共通する《地におりた天人》などから、《笛人》

は、従来の規制にとらわれない天人・天女像への転回点ともなったと推測されるのである。

- 1 澤田が亡くなる前年に、代表作や本人のコレクションを収蔵する熱海市立澤田政廣記念館（現・熱海市立澤田政廣記念美術館）が開館した。同館は澤田作品一三三七点を収蔵する。2021、熱海市立澤田政廣記念館「熱海市立澤田政廣記念館所蔵作品目録」熱海市立澤田政廣記念館、日展史編纂委員会編「日展史6 帝展編1」社団法人日展、三六九頁、四七七番、図版三八一頁。
- 2 澤田寅吉の名で《人魚》出品。1982、日展史編纂委員会編「日展史6 帝展編1」社団法人日展、三六九頁、四七七番、図版三八一頁。
- 3 出品時の作品名は《笛》である。1971、『第三回日展集』美工出版、図版二七頁、作品解説三頁。当館に収蔵されてからなぜこのような改名が行われたのかは不明。
- 4 1971、日野耕之祐「美をきく 澤田政廣氏」『産経新聞』十一月二十五日。
- 5 1977、小川正隆「澤田政廣の芸術 木に刻まれた奔放なローラン」『VISION 陽春号』vol.201、四十五―四十八頁。
- 6 熱海市立澤田政廣記念美術館の年表による。『日展史』では確認できず。
- 7 一九〇七（明治四十七）年から一九一八（大正七）年まで開催された文展を中心とする裸体彫刻の盛行が、これまで伝統とつながりを強く残している木彫家にも影響を与えたことが指摘されていることから、澤田の彫刻制作にも少なからず感化したと推測される。2014、藤井明「近代日本彫刻における人体表現の受容と展開」井原市立田中美術館編「ジャパニーズ・ヴァイナー」彫刻家藤井浩祐の世界」二一九―一三八頁、井原市立田中美術館。
- 8 1982、澤田政廣「対談 回想の木彫界」（前掲誌2）六〇八―一六頁。
- 9 前掲誌4参照。
- 10 女性像ではないものの、天人・天女同様に仏教主題である、笛を吹く「迦陵頻伽」や「迦楼羅」の立体および平面のシリーズを、昭和三十年代初期から昭和四十年代終わりにかけて集中的に制作しており、人頭鳥身の「迦陵頻伽」は、天人・天女の作品群を連想させる女性の上半身で表現されている。
- 11 1972、「美の供養―第三回日展から⑨ 流動美と漂う叙情―笛―（彫塑）澤田政廣」『河北新報』六月二十一日。
- 12 1993、熱海市立澤田政廣記念館編『フミの軌跡と筆の軌跡―熱海市立澤田政廣記念館―』二十六頁。

作品および資料調査で、熱海市教育委員会生涯学習課および熱海市立澤田政廣記念美術館にご協力を頂戴しました。感謝申し上げます。

逆立つ髪と裸体、中性的な顔立ちの点で《笛人》と共通する《地におりた天人》などから、《笛人》

は、従来の規制にとらわれない天人・天女像への転回点ともなったと推測されるのである。

澤田が亡くなる前年に、代表作や本人のコレクションを収蔵する熱海市立澤田政廣記念館（現・熱海市立澤田政廣記念美術館）が開館した。同館は澤田作品一三三七点を収蔵する。2021、熱海市立澤田政廣記念館「熱海市立澤田政廣記念館所蔵作品目録」熱海市立澤田政廣記念館、日展史編纂委員会編「日展史6 帝展編1」社団法人日展、三六九頁、四七七番、図版三八一頁。

澤田寅吉の名で《人魚》出品。1982、日展史編纂委員会編「日展史6 帝展編1」社団法人日展、三六九頁、四七七番、図版三八一頁。

出品時の作品名は《笛》である。1971、『第三回日展集』美工出版、図版二七頁、作品解説三頁。当館に収蔵されてからなぜこのような改名が行われたのかは不明。

1971、日野耕之祐「美をきく 澤田政廣氏」『産経新聞』十一月二十五日。

1977、小川正隆「澤田政廣の芸術 木に刻まれた奔放なローラン」『VISION 陽春号』vol.201、四十五―四十八頁。

熱海市立澤田政廣記念美術館の年表による。『日展史』では確認できず。

本の窓

パトリック・プリングリー著
山田美明訳
『メトロポリタン美術館と警備員の私―世界中の（美）が集まるこの場所で―』
晶文社 二〇一四年



ほつとスポット実技室

実技室エデュケーショナルスタッフ 岡崎あさ乃

七月より実技室で働いております。実は以前も同じ職務に就いており、この度十三年ぶりに再び実技室の教育普及スタッフとして復帰いたしました。

当時は「普及活動最前線」といった景色の中で、若かった私は目の前の仕事をこなす事で手一杯でしたが、歳を少し重ねた今は、実技室という場を以前より俯瞰で見ることができるようになっております。とともに教育普及の取り組みの歯痒さも感じています。

美術館の役割である美術品を収集し永く守り続けるという以外に、愛でて愉しむ人口を増やさないと美術館が褪せて廃れてしまふ……。子どもを持ち親となって周りを見渡して思うのは、美術館という場がまだ、高尚な行き先、だという事です。「休日に少し時間が空いたから美術館でも行こうか」と



私が童心で作った、ねんど教室の「ねんどくん」

フラットと出かける家庭はまだ少ない……

私の周りの母業を頑張る同士に、子どもと美術館へよく行くなどと話をすると大体決まって返ってくる言葉は「すごいね」や「子どもとよく行けるね」なのです。ああもっと美術館が身近な行き先候補に挙げられたいの、と願いながら実技室の年間スケジュールを考えたり普及策を思案したりする事が今とても興味深く面白いのです。

実技室で行われているプログラムは一つ一つがよく考え練り上げられており、私自身が刺激を受け童心に返るほど。そしてまた実技室に関わる講師や助手などスタッフが皆様、最高なのです。プログラム参加者の充実度をひたすら高めようと尽力してくださる方々でありながら、どこまでも健気で謙虚だったり。十三年前に自分が託したバトンを、沢山の方の手を経てまた自分が受け取ってリレーしている事も、とても感慨深く、熱くなります。

字数的に書ききれませんが、六月に割とドラマティックな展開があり、ご縁で繋がって今私はここにいます。当時一緒に働いていた仲間が、時を経てまた実技室に集っているという喜びを噛みしめながら、この在任期間を思いきり楽しみ尽くすつもりです。

利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)
休館日：毎週月曜日(月曜祝日・振替休日の場合は開館、翌日火曜日休館) 年末年始
※詳細はウェブサイト等でご確認ください。

アクセス

- ◎JR「草薙駅」県立美術館口から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡IC、清水ICから約25分 日本平久能山スマートICから約15分
- ◎新東名高速道路 新静岡ICから約25分

ウェブサイト：<https://spmoa.shizuoka.shizuoka.jp>



※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2
企画総務課/Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767
学芸課/Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742



静岡県立美術館
Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

「次世代へつなぐ！静岡県立美術館 アートとみどりの散歩道 再生プロジェクト」 結果報告

実施期間：令和6年8月2日～10月30日
寄付総額：10,597,000円
支援人数：189名

昨年の夏から秋にかけて、プロムナード設置作品《アマリス》と《地簾》の修復を主目的として、当館初となるクラウドファンディングを実施しました。この結果、当初目標としておりました10,000,000円を超えるご寄附をいただくことができました。たくさんの温かいご支援をいただきありがとうございます。

ご寄附を活用し、令和6年度中に作品の修復や植栽の整備を進めてまいります。各作業の様については、SNS等を通じて随時ご報告いたします。また、最終的な修復の成果を本誌158号(令和7年7月発行)に掲載予定です。ご協力いただきました皆様に、館員一同、心より御礼申し上げます。

来年度企画展(予定)

ブルックリン博物館所蔵 特別展 古代エジプト
4月19日(土)～6月15日(日)

これからの風景
コレクションから想像するいくつもの地平(仮)
7月5日(土)～9月23日(火・祝)

金曜ロードショーとジブリ展
10月11日(土)～令和8年1月4日(日)
(12月30日～1月1日は休館)

中村宏展
1月20日(火)～3月15日(日)